

台湾における日本語教育

著者	張 雪玉
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 5: 24-31 (1987)
発行年月日	1987-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022383

台湾における日本語教育

張 雪玉

一、まえがき

歴史的、地理的、さらに貿易経済面などいずれの観点からみても、台湾と日本との関係は非常に密接だと言える。だから、台湾では、日本語の教育も外国語教育の一貫として、かなり重要視されている。この日本語ブームに乗り、学校で行われる日本語教育の他に、日本語補習班（塾にほぼ当たる）が至るところに設けられている現状である。以下、台湾における日本語教育の実態をまず報告し、その問題点、今後の課題、さらにはそのあるべき姿などについて論ずることとする。

二、台湾の日本語教育の実態

筆者は、1979年に、輔仁大学東語系（注1）を卒業し、卒業後、日本商社と貿易関係のある会社に勤めたり、日本語補習班やYMCA社会教育機関で日本語教育に従事した経験があるので、台湾の日本語教育の実態も大まかに知っている。

台湾における日本語教育を学校におけるものと社会におけるものとに分け、そのおののを次のように分ける。

1. 学校における日本語教育

- A. 大学や大学院の日本語専攻の日本語教育
- B. 大学における専修科目の日本語教育
- C. 専科学校の日本語教育
- D. 職業学校の日本語教育

2. 社会における日本語教育

- A. 日本語補習班の日本語教育
- B. 大学に附属するいわゆる「推广教育センター」及び民営会社の日本語教育
- C. ラジオ放送の日本語教育

以下、その詳しい内容を順に紹介していく。

1. 学校における日本語教育

1-A. 大学や大学院の日本語専攻の日本語教育

台湾では、高校を卒業した者は、全国統一の大学入学連合試験の成績により、大学での専攻科目を決められる。国立大学には、日本語を専攻できる学科を持っているところはなく、日本語学科のある四つの大学は、皆私立である。入試により、輔仁大学・東呉大学・淡江大学・文化大学にふり分けられる。この四つの大学の中で、輔仁大学日文系の系主任（注2）は日本人で、他の三つの大学の系主任は皆地元の人である。

1-A-（イ）. 日本語学科の学習プログラム（注3）について

修業期間から言えば、昼間部の方は四年間、夜間部の方は五年間である（注4）。各大学の日本語学科の必修科目は殆ど同じである。台湾の日本語学科の学生がどのような授業科目を学習するかについて、次に1975年～1979年の四年間の学習プログラムを示す。各学

年（注5）の課程を記せば、次の通りである。なお、※印は日本国籍の教師が担当する。

1年生	日本語文法	週4時間
	初級日文	週4時間
	※会話	週6時間
	作文	週2時間
	LL実習	週1時間
2年生	中級日文	週3時間
	※会話	週4時間
	翻訳	週2時間
	※作文	週2時間
	※日本地理	週2時間
	LL実習	週1時間
3年生	日本名作選読	週2時間
	高級日文	週2時間
	※言語学概論	週1時間
	翻訳	週2時間
	※日本史	週1時間
	※日本脚本選読	週1時間
	新聞記事講読	週1時間
	※会話	週1時間
	※日本語の発音（音声学）	週1時間
4年生	日本名作選読	週2時間
	※日本語修辞学	週2時間
	※現代日文書信文	週2時間
	日本文学史	週2時間
	※日本古典文学	週3時間
	※専攻テーマ研究	週1時間
	（卒論の指導）	週1時間
	※日本現代散文選読	週1時間

以上の専攻科目（112単位）と教養科目（注6）（24単位）、さらに英文の24単位を合わせて、修了まで160単位を取得することになる。また、上記中の現代日文書信文という科目は主として商業関係の手紙文の作成であって、卒業生が会社で仕事をするに当たって必要な、実際的な科目である。

1-A-(ロ)．出版物について

日本語に関する出版物については、各大学とも書籍を発行している。輔仁大学の『日本語日本文学』は論文集であって、国内外各大学との学術交流を目的とする。これに対して、「系友通訊」のような新聞も発行していて、これは卒業した先輩と在学中の後輩

との親睦を深めるものである。

1-A-(ハ)．学内外の活動

輔仁大学の三年生になると、毎年、日本語劇を上演する。日文脚本選読の授業で扱った作品を用いて演出がされる。その時には日本語教育にたずさわっている人や劇に興味を持っている人を招待して観賞していただくのである。これは日文系の学生にとって、非常に有意義な行事と言われている。

また、毎年、日本の交流協会とアジア航空会社がそれぞれ日本語スピーチコンテスト大会を開催している。日本語学科のある四つの大学は代表者を派遣してそれに参加している。このような活動を通して、日本との交流を深めようとするその目的は、十分に達成されている。

そのほかに、学生の会話能力を向上させるために、そして、学生に日本文化を理解させるために、各大学の日文系と日本の大学とは姉妹校の関係を結び、夏休みを利用して、日本語研修班を組織し、日本の姉妹校で短期の研修をしている。この活動は、文化交流の面で大きな役割を果たしており、学生の間で大変人気を呼んでいる。四つの大学のそれぞれの姉妹校は次の通りである。輔仁大学－南山大学、東呉大学－拓殖大学、淡江大学－麗沢大学、文化大学－天理大学。

大学の日本語教育のほかに、両国の文化交流を促進するために、そして、貿易や経済方面の研究者を育成するために、東呉大学、淡江大学、文化大学など三つの大学院ともよりよい研究環境を作り出そうと懸命に努めているが、学生の研究過程において、資料の入手や日本語学習の環境など、いくつかの難点がある。また、日本が近いため、本格的な日本語研究や日本研究は日本へ行ってやればいいという風潮もある。こうした理由で、台湾の日本研究の大学院生や大学院を卒業した者は、やはり留学を目指して努力している。従って、日本の交流協会は毎年、大学を卒業した者を対象とした奨学金留学生を選考しているが、この試験を受ける者の中で、大学院の院生や大学院を卒業した者がかなりの人数を占めているので、試験の競争率は極めて高いのである。

1-B．大学における選修科目の日本語教育

日本語専攻の学生のほかに、全国各大学とも第二外国語という選修科目がある。いわゆる第二外国語は、普通、日本語、ドイツ語、スペイン語、フランス語などを指す。撰修単位は12単位で、日本語を選修するものが最多数を占めている。日中両国語とも漢字を使っているため、易しいという錯覚に陥る学生もいるし、実用的な見方から選修する学生もいる。

日本語を選修科目として、真剣に勉強するものもいるが、自分の専攻科目ではないという心理で、単位さえもらえば十分だと思えるものが多いようである。それは、授業の時間数が少なく、また、日本語教師の教授法にも原因があるためと思われる。

1-C．専科学校の日本語教育

台湾の専科学校には、二年制、三年制、五年制などがある。主として、工業、商業、観光方面の人材を育成するために設けられた学校である。今日の台湾で、これらいずれの方面とも日本語と密接な関係があるので、専科学校での日本語教育もますます重要視されてきた。日本語を第二外国語として選択する学習者は多い。

専科学校の中で、国立台中専科学校は1980年に、応用言語学科を設置した。主な目的は

商業日文、つまり商業のための日本語の習得である。これは中学校を卒業した者を対象として、五年間勉強する五年制専科学校である。卒業生が商業界で活躍することは注目される。

また、高雄には、文藻外語専科学校という外語学校もあるが、残念なことに、こちらには日本語学科はない。

1-D. 職業高校の日本語教育

社会の需要に応ずるために、近年、職業高校の学生も積極的な態度で、日本語を習っている。その中で、観光科の学生はもっとも熱心に勉強している。統計によると、台湾の観光事業の発展にともない、台湾を訪れる観光客は年毎に増えている。特に、地理的な関係で、日本の観光客の人数は第一位を占めている。逆に、台湾から日本へ観光に行く人も多いのである。このような社会的な需要があるので、観光科の学生は、将来の事を考えて、日本語を流暢に話せるように一生懸命に勉強する人が多い（例えば、台北の稻江商業学校、西湖工業商業学校及び台中の宜寧中学の観光科の学生がそうである）。勤勉な学生の場合、学校での日本語の授業以外に、日本語補習班に通うものもかなりいる。

2. 社会における日本語教育

2-A. 日本語補習班の日本語教育

台湾の日本語補習班は、至るところどこにでもある。補習班はそれぞれ学生を集めるために、いろいろな宣伝をしている。だから、台湾で新聞を開いてみると、日本語補習班の広告があちこちに載っているのが目につく。このような補習班は、学生を募集して、補習班の所在地で授業を行うだけでなく、日本語教師を各会社に派遣して、日本語を教えたり、学生の家まで日本語の家庭教師を送ったりする方法さえ取る。筆者も補習班で日本語教師をしていたとき、これら全部のタイプの教師を体験した。補習班に通う学生の職業も多種多様である。だから、補習班でも学生の立場を考えて、授業の時間についてかなり配慮している。会社員、学生、または夜間に働いている人などに向けて、多様なクラスを開き、どんな時間でも授業が開かれているようになっているので、学習者は自分に一番都合のよい時間を選ぶことができる。

補習班同士の競争は激しいから、有名な教師の名前を宣伝したり、無料で一回講義を開いたり、あの手この手を尽くして学生の奪い合いをする。補習班といえば、まず、学生の数が一番多いYMCAや青年服務社などが挙げられる。

YMCAは世界的組織である。日常生活の教養にかかわっている全ての科目の中で、最も権威を持っているのは、外国語の学習である。この組織には教師交換の制度がある。日本語の場合は東京の同組織との提携によって、日本から教師を派遣して指導している。この点で、外語学習の環境の点からいえば、より恵まれているといえ、学習者の信頼を勝ち得ている。YMCAの日本語コースは朝7時30分からいろいろなクラスが開かれている。特に、夏休みには、インテンシブ・コースがあるので、青年学生が夏休みを利用して勉強できる。学生にとっては有意義な勉強だから大変人気がある。また、学費が安い点も学生の数が多い理由だと思われる。

学生の数でYMCAと同列におかれるのは青年服務社である。これは中華民国救国団が若い人のために設けた社会教育の機関で、規模はYMCAとほぼ同じである。

筆者は渡日前に、台中のYMCAで日本語教育に従事した経験があるので、YMCAの

状況も比較的詳しく知っている。ここで、その実態を明らかにしておきたいと思う。

YMCAの日本語教師は、主として、日本に留学した経験のある人や日本語学科を卒業した人、及び日本人の三者からなるが、正式に日本語教育を受けた教師は多くない。台中のYMCAの日本語教師は十数名である。毎月、必ず討論会が開かれ、指導状況を相談したり、テキストの問題を検討したり、お互いに意見を交換する。テキストの問題はいつも討論の焦点になる。私の任期中、テキストが変わったことがあった。1985年4月以前、採用された教材は早稲田大学語学教育研究所が出版した日本語教科書である。その教科書は全部で六冊あり、学生のレベルによって段々難しくなる。この教科書の優れた点は、文型によってたくさんの例文が挙げられているので、初心者にとって分かりやすいという点である。但し、日本の千駄ヶ谷日本語教育研究所が、日本語の学習速度を早めることができるというSDM（科学的直接法）を発表した後、YMCAも討論会を通して、同組織の出版したテキスト『わかる日本語』を採用することになった。但し、教師はいうまでもなく、学生の方も早稲田大学が出版した教科書に慣れていたもので、SDM教授法はいったいどの様な効果をもたらしたか検討的になった。残念ながら、テキストが変わった六カ月後に、私は日本への留学の道を選んだので、実験の結果は分からない。この次の帰国の際には、必ず調べてきたいと思っている。

テキストのほかに、副教材としてのビデオ教材も使われた。聴覚と視覚の両面から生きた日本語が学べるというので、学生は気楽にまねることができる。

以上述べてきたように、台湾での日本語学習者は多いが、本当に最後まで頑張っているものは少ない。この現象はどの補習班でも同じである。YMCAの日本語コースは八週間を一期として教える。50音から習うクラスはJ₁と称して、次にJ₂、J₃、J₄……のように段々難しくなる。ただし、J₁からのクラスを35人とすれば、J₄のクラスまで進むと12、3人しか残っていない。このことは教師討論会で検討しなければならない問題である。

そのほかに、YMCAでは、一期毎の講義の終了後、学生の実力をテストして、80点以上取ったものには各課程（J₁、J₂、J₃…）の修了証明書を出す。また、全国的な活動も定期的に行われる。例えば、全国各地のYMCAから代表者を選出して、日本語の弁論大会を行う。優勝した人は日本旅行に招待したり、いろいろな賞を与えるので、学生もそれを楽しみにして勉学に励むのである。

2-B. 大学に附属する推廣教育センター及び民営会社の日本語教育

大学には、正規の教育の他に、社会で働いている人に研修の機会を提供するために設けられたいわゆる推廣教育センターがある。このセンターは高校を卒業した社会人を対象とし、希望する科目を選んで学習することができる。勿論、日本語もその中の一科目である（例えば、輔仁大学の推廣教育センター）。指導機関は大学であるので、学生は信頼感を持っているし、学習態度も積極的である。しかし、これはやはり補習教育の性格上、大学の学生のように単位をもらうことができない。

次は、民営会社の日本語教育の実態である。制度が整っている一部分の民営会社には、社員のための日本語コースが開かれている。特に、日本商社の支店や日本商社と取引関係にある貿易会社では、日本語が必要になるので、日本語教育は社員教育の一つの重要な課程といえる。これらの民営会社の日本語教師は社内の日本人社員が担当したり、補習班や

YMCA派遣の日本語教師が担当したりする。社員の学習態度も補習班の学生より積極的である。

1-C. ラジオ放送の日本語教育

毎日が忙しい人や補習班に通う余裕のない人にとって、電波を通して日本語講座を聞くのは一番経済的な方法だと思われる。テキストを読みながら、ラジオ放送の先生の説明を聞いて、日本語が上達する人も段々多くなっている。筆者が渡日前、この日本語講座（空中日語教室と称する）の担当講師は国立政治大学の林綺雲先生であった。

三、今後の課題及び日本語教育への希望

以上、簡単に台湾における日本語教育について紹介した。台湾での日本語学習者が多いと言う事実はいうまでもないのであるが、現在の日本語教育に満足している人は少ない。これは今後台湾における日本語教育の克服すべき課題である。そこで、以下にこのようないくつかの課題を検討してまとめてみる。

A. 日本語教育に携わる優秀な人材を育成する。

優秀な日本語教育者を育成するためには、まず、その需要に見合う日本語教師の供給が問題になる。台湾で日本語を担当している教師の中に、本格的に、日本語の教授法や教材の開発の訓練を受けた人は少ない。特に、日本語の文法など、度々無味乾燥に思われがちであるが、これを特別な教授法で教えないと学生に受け入れられにくいのではないかと思う。だから、日本語学習者のレベルを向上させたり、日本語を習い始めたものにさらに続けて学習の興味を高めさせるため、日本語教師の養成は差し迫った問題になっている。

B. よりよいテキストの作成

台湾で出版された日本語のテキストの種類を見ると、目がくらむほど選ぶのに迷ってしまう。特に、日本語を独学で学びたいひとはどのテキストがいいかわからない。その中で、本当に権威を持ち、信頼のおけるものは極めて少ない。私の知っている限りで話せば、補習班や大部分の日本語教師が採用しているテキストはほぼ以下の4種類である。

- 1、『日本語教科書』（早稲田大学語学教育研究所）
- 2、『わかる日本語』（千駄ヶ谷日本語教育研究所）
- 3、『生活日本語』（日本文化庁）
- 4、『実用日語読本』（台湾の統一言語センター）

この中の1～3は日本国籍の教師に愛用されている教科書である。

この現状からみれば、日本人が書いた教科書の方が人気を呼んでいることはあきらかである。しかしながら、今まで、完璧なテキストはまだ現れていないので、今後いかに画期的なテキストを作り出すかは日本語教育に携わる人々の大きな課題だと思う。特に、日中両国語の対照研究に基づき、台湾における日本語教育にふさわしい教科書や副教材を作り出すことをなおざりにしてはいけない。この方面の対照研究については、草薙氏の論文（月刊言語1979、NO.3、P.57）の中にも、この考えが窺える。即ち、「…しかし、これらの教材の基礎となるべき対照研究ということになるとまだまだこれから日本語教育の研究分野での大きな課題といえるだろう。」。私も以上と同様な考えを持っているので、「日中両国語の対照研究」のテーマのもとに大学院で勉強している。

そこで、日中両国語の対照研究が日本語教育にとってどんなに重要であるかを1例だけ

あげておきたいと思う。

中国語の助動詞（能願動詞）の「要」という字は日本語に翻訳すると九種類の意味を持つことになる。例をあげると次の通りである。

- ① 欲しい
中：我要一杯水。
日：私は水が一杯欲しい。
- ② もらう
中：我向老師要了書。
日：私は先生から本をもらった。
- ③ 必ず…する、きっと…する（必然性を表す）
中：人不喝水就要死的。
日：人は水を飲まなかったらきっと死ぬ。
- ④ …したい
中：我要去看電影。
日：私は映画を見に行きたい。
- ⑤ …しなければならない
中：人要正正當當。
日：人間は正当でなければならない。
- ⑥ …させる
中：他做了暗示要他們去。
日：彼は合図をして彼らを行かせた。
- ⑦ …だろう
中：這次的学会你要去吧！
日：今度の学会にあなたは行くだろう。
- ⑧ まもなく…、もうすぐ…
中：就要下雨了。
日：まもなく雨がふるでしょう。
- ⑨ きまって…する（習慣を表す）
中：一倒中午那個人就要出門。
日：午後になるとあの人はきまって出かける。

このように、中国語のただ一語を日本語に翻訳する場合、いろいろな意味になることがある。逆に、日本語のただ一語を中国語に翻訳する場合にもいろいろな意味になることがある。例えば、日本語の「できる」にあたる中国語の助動詞は「可以、可、能、会、得」など五種類の訳し方がある。だから、台湾の日本語学習者は、音韻、語彙、文法などの方面における日中対照研究の成果を生かし、台湾の日本語学習者にふさわしいテキストや教授法を開発すべきだと思う。

C. 日本語教育のねらいの再検討

日本語教育の目的の最も重要なものとして、日本語学研究や日本研究への寄与をあげることができる。だが、台湾の日本語学習者の大多数は実用主義や功利主義の立場に立って日本語を学んでいる。社会の日本語専攻の学生も同じ目的を持っている。つまり、卒業後、

日本商社の支店や日本と貿易関係のある会社に勤めたい、あるいは日本語教師になりたいなどというねらいを持っているのである。勿論、文化交流や相互理解を促進することに役立っていることはいうまでもないが、台湾の日本語教育ではあまりにも実用本意の傾向が強すぎると私は思う。もし、もっと多くの学習者が目的を日本語学研究や日本研究におくならば、台湾の日本語教育は必ずより実り豊かな成果を生み出すことができると思う。したがって、この方面の努力は今後の重大な課題だと思う。

注

1. 1984年から「日文系」に名前が変更になった。
2. 台湾では、各大学の各学科のリーダーは「系主任」と呼ばれる。
3. このプログラムは筆者1975年～1979年の四年間の学習プログラムである。
4. 台湾の大学では、殆ど日間（昼間）部と夜間部との区別がある。
5. 台湾では、学年は9月に始まり、2学期編成である（1学期（前期）は9月から2月上旬まで、2学期（後期）は2月下旬から6月末まで）。
6. 教養科目は大学各学院共同必修科目である。たとえば、中国通史（中国の歴史）、国文（中国文学関係）、国父思想（孫文の思想）、人生哲学（人生や宗教に関する学問）、中国現代史（中国近代以来の歴史）など、合わせて24単位である。

【参考文献】

- 川口さち子 1985 学習者の立場から語学教育を考えるー中国語学習者の体験を通してー『日本語教育』55号
- 木村宗男 1974 日本語教育の歴史と展望 『言語生活』279 筑摩書店
- 草薙裕 1979 アジア諸国の大学における日本語教育 『月刊言語』8-3
- 高田誠 1974 対照言語学ー現状の概観と研究の枠組の素描ー 『言語生活』279 筑摩書店
- 玉村文郎 1978 アジアにおける日本語教育 『言語生活』322 筑摩書店

（信州大学大学院人文科学研究科）